
Seem to Bird

レイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seem to Bird

【Nコード】

N9237G

【作者名】

レイト

【あらすじ】

時がすべて解決してくれる。そんな救いにもすがれない彼は、前置きもなく目の前の現実を破壊されていく。その先にあるのは救いか、破壊か。それすらもみえないまま、彼はさまよい続ける

第一節

僕ら人は空とぶ鳥を羨む。

さえぎる物のない空で、自由に、どこまでも飛ぶ鳥を。夢に見るように、肌をなぞるような風は心地よく、見下ろす大地に感動し、空に身を任せる。

でも、羨んでも叶わない願いだからそれに似せようとする。それでも、いくら似せようとしたところでそれになることは出来ない。だって僕らは地上に生きる人だから、地上で生きる命だから。その前提の中に生きる、命なんだ。

でもね。それでも僕ら人は考える輩で、太陽を望む向日葵だから、願わずにはいられないんだ。だってそれが僕らの、生きる道標となるから。

きっとそうなんだって、思ってるから

時が何もかも解決してくれるっていうけど、実際どうだと思っ？本当に時は解決してくれた？

僕の質問にYesって答えた人は、きっと勘違いをしてたんだろうな。勝手な思い込みで自分を追い込んで、勝手に不幸だと思ってる。少なくとも僕には、時なんて解決してくれなかつた。だって、なにひとつ変わっていかない、変わらない。いつまで経っても変わってなんかいない。そんな憂鬱が、僕に纏わりつくんだ。

ニワトリは所詮ニワトリでしかない

「そんなニワトリはやがて喰われる、か。皮肉だな。トラブルを避けようとしたのに、別のところからトラブルは廻ってくる。他人と関わらずにはいられないんだ、人は」

彼の眼には、殺人現場が映っている。見ていられない程の惨状だ

が、数ある野次馬のなかで唯一その死体から目を離していない。それを気味悪がる人もいた。しかし、そんな状況にありながらも、彼の心に変化はなかった。惨状になにも思わず、ただただ客観的に「またか」

と、諦めに近いため息を漏らすのだった。

「お前か」

そんな彼に声をかける者がいた。彼の視線が、死体から離れ、声のする方へ向けられる。そこには、眼の下にクマのできた巨漢の刑事がいて、テレビで見るとようなロングコートを纏わずに、ひたすらラフなシャツ一枚とジーパンでその刑事は現れた。少なくとも、なぜ彼がテープの内側にいるのか疑問に思う人もいるだろう。

「はあ・・・」

死体をみていた彼は、刑事からも目をそらし、ため息をつく。

「なんでいるんですか」

「なんでって、見ての通りだ。事件があるからここにいる。それだけだ」

「正直、なんであなたみたいな人が刑事なのか疑いますよ」

「ふふん、凄いだろ」

「・・・」

彼は何も言わず、現場から立ち去ろうとした。その様子に刑事は、慌てて彼の手を引っ張り、テープの内側へ投げ出して、地面にはたき倒す。

「っ、なにを」

「お前か、やったの」

突然の一言に彼は冗談だと思うが、その刑事の眼があまりにも真剣だったため、冗談ではない事に気づき、口を結ぶ。その刑事は彼を見下ろし、拳を力強く握っていた。そこには、怒りが垣間見えているような気もした。

「なんで俺なんです？」

彼は、まともに尋ねた。

「……」

「だんまりですか」

「……」

「佐上刑事！」

事件現場の中心にいたスーツ姿の青年が、佐上と呼ぶ刑事に声をかけた。

「なにしてるんですか無関係な少年に。痛がつてるでしょう。そんな奴より、凶器が見つかりましたよ。早く来てください。事件、早く解決しそうです」

「ふん、犯人は人だ。凶器じゃない」

「へっ？……そんなの、当然じゃないですか。一体何を……」

「馬鹿が、気づいてからじゃ遅いんだよ。何も見ちゃいねえ」

「な、なにを怒ってんすか。僕はただ……」

「俺はそんなあなたが嫌いだ。」

投げ出されていた少年が、二人の刑事を一瞥しながら立ち上がる。また巨漢の刑事が、笑みをこぼした。

「人を試すようなことを……、まったく。夕チが悪い」

「俺はお前を心配してやってんだ、感謝しろよ」

「感謝するのはあなたの方だ」

「ふん。何を言ってる」

「とぼけないでください。逃げられませんかよ、メガネをかけた人」

ポカンとした新人刑事をよそに、巨漢の刑事はその身にたがわず、素早く行動していた。彼の向かう先は、少年の目線の先にいる一人の男だった。

「ひっ」

こちらを窺っていた男は、正体に気付かれた事に気付く。

そしてとつさに身をひるがえした。が、突然刑事が動き出したために、離れることもできず、あっさり取り押さえられた。

「ついてねえな、あんた。ほんと夕チの悪い奴に目をつけられるなんて」

「は、離せっ！」

「そうはいかないのが御時世だ。堪忍しな」

佐上刑事は得意げにそう言うが、少年はそれを切り捨てるように言う。

「古臭い」

「・・・お前な、人が気分良くしてる所を」

「それに、俺を利用しようとするアンタの方がタチが悪い」

「自分がタチ悪いっての、否定しないのな」

「・・・」

「なにがなんだか」

その場にいる少年と巨漢の刑事以外、全員が訳分からずに、刑事の張り倒すかのような笑い声に耳を塞いでいた。

第一節（後書き）

某小説とキャラが似てしまっているような気が……。
まあ、似てしまわないよう努力あるのみ

とりあえず初投稿、よろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237g/>

Seem to Bird

2011年1月14日14時35分発行